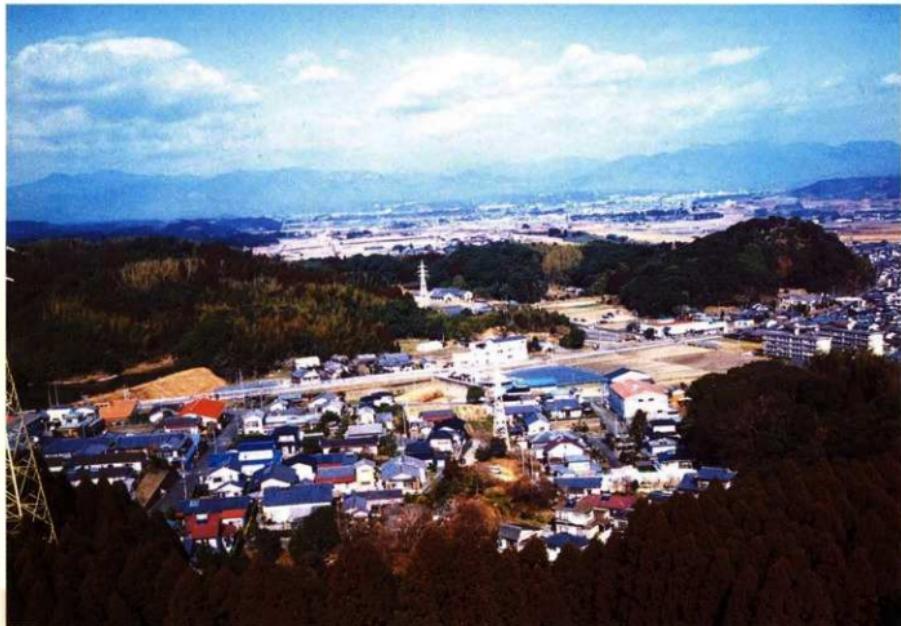


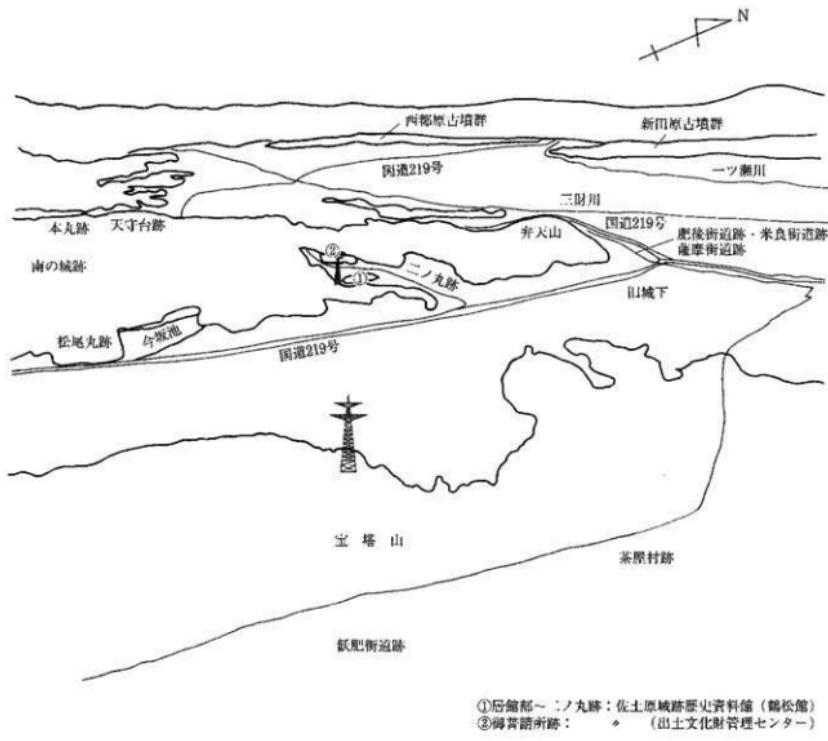
さ　　ど　　わら　　じょう　　せき
佐　土　原　城　跡　I

佐土原城跡居館部の発掘調査
本丸部・天守台跡の確認調査の報告書



-1999.3-

宮崎県宮崎郡佐土原町教育委員会



上空（南東方向）から見た佐土原城と城下

佐土原城の築城年は明らかではないが、建武年間（1334～1338）に田島氏によって築かれたといわれ、城の構築及び城下の整備は伊東義祐の代（天文6年～1536）から島津以久の代（慶長8年～1603）そして2代忠興（寛永2年～1625）までかけて造築・補修が加えられてきた。

その後、1625年には山の上の本丸から山下の二の丸へ政事の中心を移したが、城郭は明治3年（1870）の広瀬軒城になるまでの約600年間、この地域の統治のシンボルであった。

城下は、一ツ瀬川を北に望み飫肥街道が宝塔山（写真手前）の中央峰を通り、途中北西方向と西方向から薩摩街道・肥後街道・米良街道が進入し、4ルートが結節する。

中世から密接な関係にある都於郡城は佐土原城の西北西3kmに、宮崎城は南方向8.5kmに構えている。

序

この報告書は、「佐土原城址概要報告書Ⅰ」（平成3年3月）によりその概要を報告しました「佐土原城址」の第1次調査・第2次調査の発掘調査及び本丸部・天守台跡の確認調査（一部発掘調査）の詳細な記録であります。

「佐土原城跡」（平成5年12月28日付「佐土原城跡」として県指定史跡となったのでこの日付以降は「佐土原城跡」とする）は、平成5年に宮崎県で初めて城郭史跡として県指定を受け、さらに平成9年に拡大指定となりました。現在は、国指定史跡としての条件整備に取り組んでいるところであります。

また史跡整備については、平成5年に「佐土原城跡保存整備構想」を作成し、平成8年天守台跡の確認について、平成9年天守台跡の調査により鬼瓦・金箔鰐瓦が発見され、これらの調査に基づいて平成10年から平成11年かけては、「佐土原城跡保存整備基本計画」の策定を行っているところであります。

「佐土原城跡」はその遺構の保存状況から中近世の南九州の史実を解明する上で貴重な山城であることから、長期計画に従って保存整備に努めるとともに城跡の活用を図っていきたいと考えています。

この発掘調査（居館部・周辺部）は、佐土原町の歴史資料館の建設に伴う緊急調査でありました。調査に際しましては、地元上田島地区の皆様には、献身的なご協力をいただき発掘調査を順調に進めることができました。

最後に、この発掘調査に当たり、懇切丁寧なご指導をいただきました県教育委員会をはじめ、ご協力いただきました方々に厚くお礼を申し上げます。

平成11年3月

佐土原町教育委員会

教育長 菊 池 俊 彦



例　　言

1. 本書は、佐土原城址公園整備計画に伴う当時の歴史資料館建設予定地の事前発掘調査及び本丸跡の確認調査についての報告書である。

2. 城址（城跡）の発掘調査は次の期間実施した。

・試掘調査	平成元年 2月 7日～平成元年 3月 22日	佐土原城跡Ⅰの報告内容
・第1次発掘調査（居館部）	平成元年10月31日～平成 2年 3月31日	
・第2次発掘調査（居館部）	平成 2年 6月15日～平成 2年10月31日	佐土原城跡Ⅲとして報告予定
・第3次発掘調査（土塁跡）	平成 3年 6月	
・第4次発掘調査（普請所跡）	平成 5年12月～平成 6年 2月	
・本丸部跡確認調査	平成 8年 3月	佐土原城跡Ⅰの報告内容
・第5次発掘調査（天守台跡）	平成 8年11月～平成 9年 3月	佐土原城跡Ⅱとして報告予定

3. 調査関係者は次のとおりである。

平成元年度

調査主体	佐土原町教育委員会	教　育　長	小　野　勝
	社会教育課	課　長	齊　藤　健
	同	課長補佐兼文化係長	日　高　幸　雄
	同文化係	主　幹	関　屋　文　子（庶務担当）
	同文化係	主　事	木　村　明　史（調査担当）

平成 2 年度

調査主体	佐土原町教育委員会	教　育　長	小　野　勝
	社会教育課	課　長	寺　坂　正　紘
	同	課長補佐兼文化係長	斎　藤　成　實
	同文化係	主　幹	関　屋　文　子（庶務担当）
	同文化係	同　主　事	木　村　明　史（調査担当）

平成 3 年度

調査主体	佐土原町教育委員会	教　育　長	小　野　勝
	社会教育課	課　長	寺　坂　正　紘
	同	課長補佐兼文化係長	斎　藤　成　實
	同文化係	主　幹	関　屋　文　子（庶務担当）
	同文化係	主　事	木　村　明　史（調査担当）

整 理 員

平成 4 年度

調査主体 佐土原町教育委員会 教育長 小野 勝
社会教育課 課長 関屋 紀久男
同 課長補佐兼文化係長 斎藤 成實
同文化係 係長 幹 関屋 文子 (庶務担当)
同文化係 主任主事 木村 明史 (調査担当)
臨時職員 日野 良子

整理員

平成 5・6 年度

調査主体 佐土原町教育委員会 教育長 小野 勝
社会教育課 課長 関屋 紀久男
同 課長補佐兼文化係長 斎藤 成實
同文化係 係長 根井 信幸 (庶務担当)
同文化係 主任主事 木村 明史 (調査担当)
臨時職員 藤木 邦子

整理員

平成 7 年度

調査主体 佐土原町教育委員会 教育長 小野 勝
社会教育課 課長 久枝 六郎
同 課長補佐兼文化財係長 関屋 重春
同文化財係 係長 木崎 久敏 (庶務担当)
同文化財係 主任主事 木村 明史 (調査担当)
調査補助員 田中 淳也
佐土原城跡歴史資料館館長 赤木 達也
同 臨時職員 後藤 啓子

整理員

平成 8・9 年度

調査主体 佐土原町教育委員会 教育長 小野 勝
社会教育課 課長 久枝 六郎
同 課長補佐兼文化財係長 新名 賢次
同文化財係 係長 東 浩一郎 (庶務担当)
同文化財係 主任主事 木村 明史 (調査担当)
同文化財係 主任主事 富田 久 (庶務担当) 平成 9 年度より
同文化財係 主任主事 黒木 直英 (庶務担当) 平成 9 年度より
調査補助員 櫛間 史朗
佐土原城跡歴史資料館館長 赤木 達也

整理員

同 臨時職員 後藤啓子

(平成8年度)、(平成9年度)

平成10年度

調査主体

佐土原町教育委員会 教育長 小野 勝 (平成10年6月まで)
菊池俊彦 (平成10年7月から)
社会教育課 課長 郡司利文
同 課長補佐 杉尾一雄
同文化財係 係長 東 浩一郎 (庶務担当)
同文化財係 主査 木村明史 (調査担当)
同文化財係 主任主事 黒木直英 (庶務担当)
調査補助員 櫛間史朗
佐土原城跡歴史資料館長 赤木達也
同 臨時職員 後藤啓子

整理員

4. 陶磁器については、佐賀県立九州陶磁文化館 大橋康二前学芸課長（現佐賀県文化財副課長）の鑑定を受けた。

また出土瓦については、滋賀県米原町教育委員会 中井均主任技師からご教示をいただいた。

5. 本書に使用した遺構の略号は、次のとおりである。

S B : 建物 S D : 溝・水路 S E : 井戸 S K : 土坑 P : 柱穴 H : 穴

6. 本報告の方位は磁北である。またレベルは海拔絶対高である。

7. 出土遺物は、佐土原町出土文化財管理センターで保管している。

8. 発掘調査後は、遺構検出面を土砂によって養生し、今後の保存整備事業に備えた。

9. 本文中の平成5年以前の「城址」は全て「城跡」と名称を変更した。

10. 本書の編集・執筆は、木村明史主査が行った。



本文目次

序

例言

第1章 調査の概要	1
1. 調査の目的	1
2. 調査の実施主体	1
3. 調査に至る経緯	1
4. 佐土原城跡の現状	2
第2章 佐土原城の歴史的環境と特徴	3
1. 佐土原城の歴史的位置	3
2. 佐土原城の地理的位置	4
3. 佐土原城跡の縄張りと遺構	7
第3章 佐土原城跡発掘調査の成果	9
1. 調査前の知見	9
2. 調査の方法	9
3. 展館部第1次・第2次発掘調査	10
(a) 調査範囲	10
(b) 基本層序	10
(c) 遺構	10
(d) 遺物	10
4. 本丸部確認調査	11
(a) 調査範囲	11
(b) 基本層序	11
(c) 遺構	11
(d) 遺物	11
5. 天守台跡確認調査	11
(a) 調査範囲	11
(b) 基本層序	11
(c) 遺構	11
(d) 遺物	11
第4章 まとめ	12
1. 佐土原城跡出土遺物・遺構の検討	12
2. 佐土原城跡出土瓦の分類	13

挿図目次

第1図 佐土原城跡の位置と周辺の區域跡	19
第2図 佐土原城跡縄張り図	20
第3図 調査区設定図	21
第4図 居館部確認調査遺構平面図	22
第5図 基本層序模式図(居館、本丸)	23
第6図 本丸部確認調査遺構平面図	24
第7図 居館部建物遺構の時期変遷	25~26
第8図 佐土原城をめぐる統治者の変遷及びできごと	27~28
第9図 佐土原城の統治者に関する系図	29~30

図版目次

図版1 居館部第1次・第2次調査空中写真	15
図版2 居館部第1次調査遺構及び検出作業風景写真	16
図版3 タ 出土状況写真	17
図版4 居館部第2次調査遺構及び検出作業風景写真	18
図版5 居館部出土瓦写真(軒丸瓦)	31
図版6 タ (タ)	32
図版7 タ (タ)	33
図版8 タ (タ)	34
図版9 タ (タ)	35
図版10 タ (掛丸瓦)	36
図版11 タ (タ)	37
図版12 タ (軒平瓦)	38
図版13 タ (42~43・45~47:軒平瓦、44:軒片切棟瓦)	39
図版14 タ (48~49:軒平瓦、50~53:掛平瓦)	40
図版15 タ (54~58~59:掛平瓦、55~57:棟瓦)	41
図版16 タ (60~64:掛平瓦、65:棟瓦)	42
図版17 タ (掛平瓦)	43
図版18 タ (72・76~77:棟瓦、73~75:掛平瓦)	44
図版19 タ (78:棟瓦、79~81:掛平瓦、82~83:片切棟瓦)	45
図版20 居館部出土銘入り瓦写真	46
図版21 居館部出土瓦実測図(1~3)	47
図版22 タ (4~7)	48
図版23 タ (8~10)	49
図版24 タ (11~18)	50
図版25 タ (19~24)	51

図版26	居館部出土瓦実測図 (25~30)	52
図版27	タ (31~35)	53
図版28	タ (36~41)	54
図版29	タ (42~45)	55
図版30	タ (46~49)	56
図版31	タ (50~52)	57
図版32	タ (53~54)	58
図版33	タ (55~63)	59
図版34	タ (64~73)	60
図版35	タ (74~83)	61
図版36	居館部出土銘入り瓦実測図 (84~87)	62
図版37	居館部出土銘入り瓦拓本	63
図版38	居館部出土陶磁器写真 (関西の皿)	64
図版39	タ (タ)	65
図版40	タ (タ)	66
図版41	タ (タ)	67
図版42	タ (タ)	68
図版43	タ (肥前の皿)	69
図版44	タ (タ)	70
図版45	タ (タ)	71
図版46	タ (タ)	72
図版47	タ (在地の皿)	73
図版48	タ (82:鍋島の皿、83:白磁の皿、84~85:染付の皿)	74
図版49	タ (86~88:上飾器の皿、89~90:上飾器の焰烙)	75
図版50	タ (関西の塊)	76
図版51	タ (肥前の塊)	77
図版52	タ (タ)	78
図版53	タ (タ)	79
図版54	タ (130~135:在地の塊、136:瀬戸・美濃の塊、137:中国地方の塊、138:九州の塊)	80
図版55	タ (九州の土瓶)	81
図版56	タ (153~155:関西の土瓶、156:在地の土瓶)	82
図版57	タ (157~159:肥前の坏洗、158:関西の坏洗)	83
図版58	タ (瀬戸・美濃の鉢)	84
図版59	タ (165~166:瀬戸・美濃の鉢、167~168:上飾器の鉢)	85
図版60	タ (169:備前の鉢、170~172:肥前の鉢、173~175:九州の鉢)	86
図版61	タ (176:備前のすり鉢、177~179:产地不明のすり鉢)	87
図版62	タ (产地不明のすり鉢)	88
図版63	タ (燒壙壺の蓋・身)	89
図版64	タ	90

図版65	居館部出土陶磁器写真 (200~203 : 肥前の仏花器、204~206 : 產地不明の仏花器)	91
図版66	タ (207~211 : 肥前の香炉、212 : 肥前の紅皿、213~214 : 肥前の壺)	92
図版67	タ (215~219 : 肥前の瓶、220~221 : 九州の瓶)	93
図版68	タ (関西の火入れ)	94
図版69	タ (228~231 : 肥前の火入れ、232 : 肥前の灯火具)	95
図版70	タ (233~235 : 在地の火入れ、236 : 九州の火入れ、237 : 在地の火鉢、 238~239 : 関西の灯火具)	96
図版71	タ (240 : 九州の壺の蓋、241 : 肥前の壺、242 : 関西の筆立て)	97
図版72	タ (243~244 : 九州のその他、245~246 : 在地のその他)	98
図版73	タ (247~248 : 関西のその他、249~250 : 產地等特定できないもの)	99
図版74	居館部出土銭写真 (第1次I区・P-95)	100
図版75	居館部出土陶磁器実測図 (1~9)	101
図版76	タ (10~18)	102
図版77	タ (19~27)	103
図版78	タ (28~35)	104
図版79	タ (36~44)	105
図版80	タ (45~48)	106
図版81	タ (49~53)	107
図版82	タ (54~62)	108
図版83	タ (63~71)	109
図版84	タ (72~77)	110
図版85	タ (78~81)	111
図版86	タ (82~85)	112
図版87	タ (86~90)	113
図版88	タ (91~99)	114
図版89	タ (100~108)	115
図版90	タ (109~122)	116
図版91	タ (123~129)	117
図版92	タ (130~138)	118
図版93	タ (139~152)	119
図版94	タ (153~156)	120
図版95	タ (157~162)	121
図版96	タ (163~164)	122
図版97	タ (165~168)	123
図版98	タ (169~175)	124
図版99	タ (176~179)	125
図版100	タ (180~182)	126
図版101	タ (183~186)	127
図版102	タ (187~199)	128

図版103	居館部出土陶磁器実測図 (200~206)	129
図版104	タ (207~214)	130
図版105	タ (215~221)	131
図版106	タ (222~227)	132
図版107	タ (228~232)	133
図版108	タ (233~239)	134
図版109	タ (240~242)	135
図版110	タ (243~246)	136
図版111	タ (247~250)	137
図版112	本丸部確認調査空中写真	138
図版113	本丸部確認調査天守台跡造構写真	139
図版114	本丸部確認調査出土瓦写真 (1:軒丸瓦、2:軒平瓦、3~9:掛丸瓦)	140
図版115	タ (掛丸瓦)	141
図版116	タ (17~19~22:掛平瓦、18:棟瓦、23:風字碗)	142
図版117	タ (タタキ痕のある瓦)	143
図版118	本丸部確認調査出土瓦実測図 (1~6)	144
図版119	タ (7~12)	145
図版120	タ (13~16)	146
図版121	タ (17~23)	147
図版122	タ (タタキ痕のある瓦)	148
図版123	本丸部確認調査出土陶磁器写真 (1~19)	149
図版124	本丸部確認調査出土陶磁器実測図 (1~19)	150
図版125	本丸部確認調査天守台跡出土瓦写真 (1~6・8~9:軒丸瓦、7:鳥糞)	151
図版126	タ (軒丸瓦)	152
図版127	タ (19~21:掛丸瓦、22~23:軒丸瓦?、24:掛平瓦?)	153
図版128	タ (軒平瓦)	154
図版129	本丸部確認調査天守台跡出土瓦実測図 (1~8)	155
図版130	タ (9~18)	156
図版131	タ (19~26)	157

表 目 次

第1表	居館部出土瓦觀察表	158
第2表	タ	159
第3表	タ	160
第4表	タ	161
第5表	タ	162
第6表	タ	163
第7表	タ	164

第8表	居館部出土陶磁器観察表	165
第9表	タ	166
第10表	タ	167
第11表	タ	168
第12表	タ	169
第13表	タ	170
第14表	タ	171
第15表	タ	172
第16表	タ	173
第17表	タ	174
第18表	タ	175
第19表	タ	176
第20表	タ	177
第21表	タ	178
第22表	タ	179
第23表	タ	180
第24表	居館部出土陶磁器・出土錢観察表	181
第25表	本丸部確認調査出土瓦観察表	182
第26表	タ	183
第27表	本丸部確認調査出土陶磁器観察表	184
第28表	タ	185
第29表	本丸部確認調査天守台跡出土瓦観察表	186
第30表	タ	187
第31表	佐土原城跡出土瓦構成表	188
第32表	居館部出土土器・陶磁器構成表	189
32-A	居館部出土土器・陶磁器器具分類別構成表	190
32-B	居館部出土土器・陶磁器製造国別構成表	190
32-①	食膳具の日本製陶磁器产地・器種別組成表（16～19世紀）	191
32-②	食膳具の产地別構成比	192
32-③	調理具の タ	193
32-④	貯蔵具の タ	194
32-⑤	その他の タ	195
第33表	佐土原城跡軒平瓦分類表	196
第34表	タ 軒丸瓦分類表	197

付 図

付図1 居館部第1・2次調査遺構平面図

付図2 佐土原城跡居館部出土陶磁器編年表

第1章 調査の概要

1 調査の目的

佐土原城跡は、中世から近世にかけて存続した城で、全国的にもその保存状態が極めてよいと一定の評価を得ている城郭である。また立地においても南九州と中九州の境に位置し、当時の南九州の覇者であった伊東氏・島津氏が支配の拠点の一つとして重視していた。

従って、城跡の保護・保存と歴史上の貴重性から、今後の保存整備を視野に入れた発掘調査を実施する。

その後、発掘調査の成果に沿った整備事業を計画するとともに調査成果を一般に公開し活用を図っていく。

2 調査の実施主体

発掘調査は、佐土原町教育委員会が実施する。

発掘調査に基づいた城跡の保存整備については下記委員会の指導・助言を受けた。

佐土原城址保存整備委員会

野 口 逸三郎	文献史学	宮崎県文化財保護審議会会長
北 野 隆	建築史学	熊本大学教授
角 梅 壽	環境計画学	南九州大学助教授
八 卷 孝 夫	城郭研究	中世城郭研究会幹事
日 高 正 品	考古学	宮崎県文化財保護審議会委員

3. 調査に至る経緯

年代順に調査に至る経緯を記す。

1986年 6月 佐土原城址遊歩道整備計画庁内打合せ会（公園の計画化）

1987年 7月 佐土原城址調査委託（測量設計）

佐土原城址公園計画書・基本計画書委託

9月 宮崎県文化課より佐土原城址の造構保存を踏まえた実施計画を作成するよう指導を受ける。

11月 佐土原城址公園計画…時中止

12月 佐土原城址縄張り調査（八卷孝夫）

1989年 1月 タ

2月 タ

佐土原城址確認調査 (居館部)

3月 タ 堀・柱の礎石等の検出 (タ)

10月 佐土原城址居館部第1次調査開始

文化庁 服部英雄調査官視察 (史跡担当)

12月 奈良国立文化財研究所 高瀬要一室長視察 (遺跡整備)

- 1990年 1月 佐土原町歴史資料館基本計画
- 3月 佐土原城址居館部第1次調査終了
造構の検出状況が極めて良好なので保存を前提に歴史資料館の建設を進める。
そこで遺構の保存と建物の位置づけ及び城址全体の保存整備を検討協議するための専門指導委員会を設置する。
- 第1回佐土原城址保存整備委員会
- 5月 第2回佐土原城址保存整備委員会
資料館は礎石に沿って柱をたて、建物全体は江戸時代初期の様式を再現する。
- 6月 佐土原城址居館部第2次調査開始
- 10月 佐土原城址居館部第2次調査終了
佐土原城址町指定 162,223m² (全城 278,924m²)
- 11月 第3回佐土原城址保存整備委員会
山城の整備と佐土原城址基本構想の作成についての指導。

4. 佐土原城跡の現状（平成元年（1989）時の現状）

佐土原城址は、全城278,924m²でそのうち、町指定は162,223m²である。また東西に町道が走り、両側には水田が広がっている。国道219号線沿いの追手口と北側鳴之口、南側野久尾口には幾つもの民家が立並んでいる。追手口登城道の西側には、九州電力の送電鉄塔が1基設置されている。

南部山塊上に位置する南の城と松尾丸にはさまれて農業用ため池である今坂池、同じく南部山塊の北方沿いにため池が設けられている。南部山塊の南側には、佐土原中学校が建ち、平城部にあたる北部山塊（弁天山）の南側沿いに家畜小屋が1軒ある。

第2章 佐土原城の歴史的環境と特徴

1. 佐土原城の歴史的位置

古代、佐土原地方は、児湯・那珂の2郡に属し郡の数は7つあり日向28郷（平安期）の4分の1を占める。

日向国府が佐土原地方に所在したことは推定されているが（西都・佐土原）、特定されていない。交通の要所として日向国府から太宰府までの経路に当たる駅の名称が延喜式に見えるが、その中で「当麻駅」は、「タジマ」の転化したもので田島郷の地（佐土原）といわれている。佐土原の城下には、古い時代の官道である西海道が通り、肥後国府・豊後国府・大隅国府方面へ往還する。

中世になると、工藤祐経が源頼朝から日向国地頭職を賜う。内容は田島30町で現在の上田島・下田島にある。伊東祐経の子の祐時の第4子と第6子が田島氏と伊東氏に分かれ、初代田島祐明は、田島に城を築いた。4代祐聰は田島を守るために大光寺を創建し、日向留守所となる。田島9代祐賀は、伊東4代祐立の三男で田島8代休祐の養子となり引出物として祐立から佐土原城を贈られたといわれる。その後、休祐が急死し、田島氏は滅び佐土原城が伊東氏の日向制覇の拠点となる。伊東10代義祐は、天文5年（1536）佐土原に入城した。元禄11年（1568）島津忠親の守る飫肥城を攻略し、日向48城を支配する。この時点で佐土原城は、都於郡城と共に伊東氏の拠点となった。4年後の元亀3年（1572）には、木崎原の戦いで島津氏に敗する。さらに5年後の天正5年（1577）島津の進軍により伊東氏は崩壊する。伊東氏が崩壊した年に宗家16代島津義久が、弟の島津家久（永吉家祖）を佐土原城へ入城させた。翌年の天正6年（1578）に県の土持親成は島津の傘下に入り、そこで日向全体が島津の支配となり佐土原城はその要となった。その後、家久の子の2代恭久が関ヶ原の戦いで戦死したため、佐土原は徳川家康の家臣庄田三太夫が代官として管理した。慶長11年（1603）、家康から相州家忠将（宗家15代貞久の弟）の子、以久が佐土原に封ぜられた。慶長15年（1610）、以久が急死。垂水城の久信が佐土原を継ぐとして佐土原で勝手な振る舞いをする。以後垂水とは緊張関係となる。同年に忠興が12歳で封を継ぎ佐土原城を補修する。寛永2年（1625）第2代忠興の時、山上から山下へ城を移した。理由は、城郭の老朽化による修繕費増大は、藩の財政では維持ができなくなつたことと江戸幕府に係わる元和元年（1615）の武家諸法度の発令による大名の城郭に対する規則（新規築城禁止・居住修補の届け出）が考えられる。以後、城主は10代忠寛まで続くが、その間、宗家に度々内政について指導を受けながら藩運営が行われた。例えば、第4代忠高における松木騒動（1）、第5代惟久・宇宿派の一掃（2）、第7代久柄・天明騒動（3）、第9代忠徹・鳴之口騒動（4）と藩の存亡にかかわるほどの内紛が幾多も繰り返されている。第10代忠寛の代に数回の災害を受けたのを機に根本的な経済の立て直しを図る政策として安政の検地（安政4年5月、総内検地）が実施された。

明治維新を迎えると、明治元年（1868）佐土原隊は、官軍として会津等で戦う。明治2年（1869）版籍奉還に従う。忠寛は、藩知事に任せられ、佐土原城について治所引移し（転城）の何書を出す。明治4年（1871）、藩を廃し、佐土原県となる。

- 註1) 第4代忠高が14歳で寛文4年(1664)封をつぎ、松木一門の村上三太夫を追放。世子、万吉丸が生まれて同年江戸で逝去。万吉丸が14歳になるまで久雄の弟、久富の長子久寿が代わって參勤交代をし、番代となる。以後、番代側と幼君を保護する側の対立。松木高清ら番代側の優位に対して宗藩光久は鳥帽子親となり万吉丸は、12歳で元服、忠充と改名。その後、松木派は松木邸にて武力討伐される。
- 2) 元禄3年5月29日(1690)、番代久寿に代わって忠光が5代藩主として独立。惟久と称した。久寿には、島之内三千石を譲った。家老宇宿久明が権力を握ろうとし、家老山口高直を追放。元禄12年(1699)、惟久は城主側の資格をえて幕府から従五位下淡路守に叙位される。元禄16年、11月26日(1703)、宇宿久明を永久追放。
- 3) 第7代久柄のとき、自然災害が相次ぎ藩の財政が底をつき、下級武士の生活も追いつめられた。そこで武士らが集会する弓場樹の会が藩政の無策をなじる会につながった。追手・鳴之口・野久尾・十文字の四つの衆が結集し、藩主に対して第久武の失脚と新体制を実現させた。
- 4) 第9代忠徳のおり、文政6年(1823)、大阪の御牧直吉の子である御牧重次郎鷹好(赤裸と号す)が遺学。途中佐土原に立ち寄った。以後、藩士の指南役として任用。鷹・門格の待遇。この原団に対して、弓場組の幹部は反発した。特に、中級武士の集まりである鳴之口は、反対派(武道派)と賛成派(文学派)の対立が激しかった。文政7年2月20日に赤裸が鳴之口弓場へ訪問した時、対立は表面化した。そこで、文政7年5月6日に宗藩から判決が下り、武道派の多くが遠島にあった。

2. 佐土原城の地理的位置

《日向の国における位置と環境》

宮崎県の城郭は、主に3地域の地理的特徴(県北県央山間部、県央・宮崎平野外縁部・県南、海岸)に沿って分布する。県北及び県央の急峻かつ狭隘な山間部は、山岳の地勢を活かして細い尾根筋の上を鎖状に曲輪がつながったり、河川に対峙して丘陵の端部に城を築いたりする。県央・宮崎平野外縁部・県南は台地状の地形が大半を占めている。台地は、入戸碎流堆積物(通称シラス)を基盤とするため水質による浸食作用を受けやすく縁辺部は崩落によって垂直な崖を呈する。この南九州特有の中世城館を形成する要素を用いて大きな曲輪や深く幅の広い空堀を普請し台地上に配置する。

県北の海岸地帯に点在する城は、海上権や港湾とのかかわりを強める拠点として位置付けていたと思われる。城郭史において「南九州型」「九州館屋敷型」「群郭式」と呼ばれ、研究者の間で表現が違っているが、佐土原城の近隣に所在する西都市都於郡城は南九州型の代表例の城である。

こうした城郭の立地背景の中で佐土原城は、鹿野田・上田島丘陵の東側先端に築かれる。地質形成は、基盤岩に宮崎層群の佐土原層(砂岩及び砂岩優勢互層)、その上に段丘疊(西都原段丘堆積物)がある。本丸・南の城・松尾丸は段丘疊で、底位の曲輪は佐土原層上に、城下は低地(沖積段丘)に築かれている。城郭は丘陵の尾根をそのまま利用し、三ヶ所の主な曲輪を軸にして付随した小さな曲輪を設ける。曲輪間は尾根を用いたルートでつながっている。従って曲輪は、相互に独立しておらず、また、本丸を中心とした連郭式の城郭でもない。丘陵地形に台地型の手法を導入した結果、半独立型の城郭が出現したと推測される。

註1) 北郷泰道「日向の中世城館跡」『宮崎県地方史研究紀要』第20号 1994 宮崎県立図書館

2) 村山修二「城の分布」『岡説 中世城郭事典』3 1987 新人物往来社

3) 千田忠博「戦国期城郭・城下町の構造と城郭性」「歴史アリヤ」P9 1990

4) 八卷孝夫「都之城郭」「都城市文化財調査報告書 第45集 都城市の中世城館」1998 都城市教育委員会

《佐土原における位置と環境》

「宮崎県中近世城館跡緊急分布調査」の結果、佐土原町内には現在まで16の城郭関連施設の存在が推定される。城郭の立地は、A台地、B丘陵地、C低地（沖積段丘）、D低地（沖積低地）とそれぞれにA内城・内田城・南岳原城、B佐土原城・諫訪城・西ノ城・ふるじい 古城・古城・廣瀬城・迫田、C古館・新城、D囲の4タイプに分類できる。時期は、中世期の内城・内田城・南岳原城・西ノ城・諫訪城・古城・迫田・古館・囲、中世期から近世期の佐土原城・古城・近世期の廣瀬城と推測される。各城郭は成立背景と機能によって築城位置に制約を受けている。城郭が築かれた中世初期（平氏政権・鎌倉後期）は、低地に堀を四方形に巡らしその中央に城館として構えた。囲・古館が立地条件で中世初期の城館に該当する。南北朝期には田島氏が佐土原に派遣されたおり、一つ瀬川沿いの南側、沖積段丘・低地を用いて店舗を構え、後背の丘陵に曲輪や堀切・豊堀等の城郭普請を行ない古城を築いている。その後、室町幕府末期から戦国期にかけて国人領主が領域支配を進め幕府や守護の権威が失われていく。そうなると領主間の争いが頻発し、国人領主は防護・攻撃に対する備えの強化に城郭施設のネットワークを探り入れていく。その中で伊東氏の時代には48里の一つにあげられる佐土原城・諫訪城、さらに48里の支城と推測される内城・内田城・西ノ城・南岳原城と町内の各地に城郭が築かれていた。しかし、戦国期を過ぎ江戸期になると江戸幕府の一国一城令・元和元年（1615）により佐土原藩においては、佐土原城の存続の理由は、田島・伊東氏時代からの佐土原支配の拠点、飫肥往還・薩摩往還・米良往還・肥後往還が結節する交通の要所など領国を治める上で機能が優先された。以後、南北朝期から江戸期まで統いた佐土原藩も明治維新の波濤にのみ込まれて、明治2年（1896）に10代藩主忠寛が佐土原藩知事に任せられたのを機に広瀬へ転城の命令が下された。

その結果、約400年続いた佐土原城は明治3年（1870）に廃城となった。

3. 佐土原城跡の縄張りと遺構

《佐土原城跡の縄張り》（第2図参照）

佐土原城は佐土原町西側の一画を占め、上田島地区中心部に馬蹄形の山城として存し、佐土原城の北東部を中心に周辺に旧城下跡を望む。

佐土原城の東側には、佐土原城と標高（60m）をほぼ等しくする宝塔山があり、佐土原城結構の一部を担っている。宝塔山には、中世から近世にかけての寺院・石塔が多く点在している。佐土原城跡と宝塔山に挟まれて武家屋敷が建ち並び、佐土原城の北東側十文字口方面には町人町が構成されていた。

城郭全体の各曲輪の配置は、主に本丸・南の城・松尾丸の3曲輪を中心に丘陵屋根の重要な部分に配置されている。本丸は平地の袋状部分を畠んだ山の西側部分にあり、標高は最高位（70m）を示し、南の城は東西の谷と南北に連なる屋根の起点、松尾丸は飫肥街道ルートを見渡す南屋根の先端に設けられる。標高は、南の城（68m）、松尾丸（58m）と各主郭には視覚的差異がある。

その中で北の屋根上に設けられた本丸は、I・II、II・IIIの曲輪間に空堀を入れ段差を意図しながら数珠つなぎに削平されている。また本丸内、中心曲輪のIの西側の屋根は、この城郭が外に続くための唯一の屋根続きの箇所であり、曲輪の南北には大きな谷がめぐり頂上部分を断てば佐土原城の山塊は独立する。本丸への入り口は、曲輪Iのa（大手道から上がる重要な

折形虎口）と曲輪Ⅱのb（上橋状の折形虎口）の2カ所である。aは、曲輪内に入ると空堀道になり櫓台跡hに進む。bは、曲輪Ⅱから曲輪Ⅰへ行く入口である。曲輪Ⅱの北側先端部には、長方形を呈する天守台跡が残る。曲輪Ⅰの西側の屋根は、自然斜面を利用しても巨大な空堀として十二分に防禦性があるので昔請はほとんど行われていない。

南の城は、屋根筋すべてがこの曲輪で収斂されている。防禦面では、南ルートからの攻撃を想定して東南に土塁をめぐらし南には櫓台yを設けている。入り口は、北側のc（折形虎口）一ヶ所である。また南の城の南側一段下にある曲輪にはd（L字形の空堀状虎口）があり、南の城の重要性を示している。

松尾丸は、最南端の曲輪で南方面の前線に位置する。周囲には、南・r1と西・r2に横堀を入れている。入り口は、北西に築かれて直線状の虎口である。

《佐土原城跡の遺構》

○山城と居館部

佐土原城は、馬蹄形の山城と山城に取り囲まれた居館部により構成されその東側前方の宝塔山を含め総構えの形をとり城下とともに防禦の機能をもっている。

○本丸部（主郭曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）

本丸部は居館部の南西方向の山城頂上（標高約72m）にあり南西方向50m、北西方向約100mのほぼ長方形を呈している。

曲輪Ⅰの南西側には梢円状の曲輪、そして北西側には細身の舌状の曲輪が付属している。本丸ⅠからⅡそしてⅢとさらに段丘状に北側に曲輪が屋根に沿って伸びている。

縄張りによるとⅠとⅡ、ⅡとⅢの間に空堀を入れ本丸部を三分割し防禦上の工夫が施されている。

ⅠとⅡは東方向に折形虎口があり、それぞれ腰曲輪を配し攻撃の役割を持たせている。調査以前の状況は、山林であった。

○天守台跡

本丸部曲輪Ⅱの北側先端東寄りの標高69mの地点に天守台跡が存する。表面はおよそ10cm大の河原石でおおわれた敷石状の遺構である。一部に石垣の先端とみられる石が露出している。

○南の城（曲輪V）

南東方向からの屋根上のルートを南の城で一旦遮断する南方向の防禦に重要な曲輪である。南の城は、本丸から南東方向の標高68mの地点にあり範囲はほぼ南西・北東方向75m、南東・北西方向25mの長方形を呈する。南の城の南東側に土塁をめぐらし、北西方向に折形虎口がある。現況は、山林で覆われている。

○松尾丸（曲輪Ⅳ）

馬蹄形丘陵の開口部南側に位置する。縄張り上では、最南端の曲輪で南方向の前線にあたる。標高約58mで範囲はほぼ東西方向約30m南北方向約50mである。

平面形は、北方向が膨らんだ逆台形状を呈する。曲輪の西側に北西から南東へ直線上の虎口が認められる。現況は、山林である。

○弁天山

馬蹄形丘陵の開口部北側に位置する。縄張り上では最北端の曲輪で北方向の前線にあたる。

山頂曲輪は、標高56mで範囲はおよそ南北約25m、東西約20mで平面は三角状を呈する。この曲輪に続く南方向の屋根先端には、堀切が1ヶ所確認できる。現在は、神社が置かれている。

○居館部と周辺

居館部は馬蹄形丘陵に囲まれた低地の中央部に位置する。標高はおよそ13mで本丸部からの標高差は59mである。範囲は南東・北西方向約80m、北東・南西方向約80mに及ぶ。

南側に大手道の入口と東方屋根の先端が見られる。東方屋根の東側は、平成元年3月の九州電力の鉄塔工事により丘陵先端を普請した曲輪状の造構が一部削平され旧地形が失われている。

居館部北側には、馬蹄形丘陵低地内を東西に町道に走り抜ける。確認調査時は、水田・畑・山林であった。

○内堀跡の状況

居館部の東側前方に位置し、北側の弁天山と東方屋根先端に挟まれる。標高はおよそ9mで居館部との標高差は4mである。平成元年度の確認調査において短軸は上面19m下面15m深さ3mで下面からは胴木と裏込め石が検出される。長軸の両端は未確認である。確認調査時は、水田であった。

○会所跡

内堀の東側前方と国道219号線の間に広がる。標高はおよそ9mで内堀とレベルをおなじくする。範囲は東西約60m・南北約60mのほぼ正方形を呈する。確認調査時は、水田が広がっていた。

○武家屋敷跡

武士団が階層ごとに城郭周辺を大手口（東）・野久尾口（南）・鴨ノ口（西）・十文字口（北）の4方面に分かれて城郭の防禦にあたった。特に居館部の入り口である大手口は、御一門・寄合・騎馬の城主直系武士団によって構成された。現在は、当時の武家屋敷は明治初期の転城のため残されていない。

○御普請所跡

居館部から町道を隔てた北西方向に位置する。標高は、およそ15mで居館部より2m程度高い。範囲は、東西約70m・南北約35mのほぼ長方形の形状を呈する。確認調査時は、畠地であった。

○代官所跡

居館部の西方向に位置し、標高はおよそ15mで御普請所跡と同レベルである。範囲は、東西約60m・南北約60mで南側に山城の屋根先端が2方向へ伸び、その間の谷まで代官所が構えていた。現状は、水田と畠が営まれている。

○その他

城郭・城下を構成する要素の1つとして町人町の存在がある。町人町は、大手口とその周辺の旧外堀の外側に位置する。

町人町へのルートは、南方向から「宝塔山」の南西側を通る飫肥往還と西方面からは、米良往還・肥後街道・薩摩街道が走り町人町で4往還が合流し、…ツ瀬川南側から一本の往還となる。城下の周辺には、寺院が伊東氏時代から島津氏時代にかけて20寺近く建立されており、藩民の心のよりどころとなっていた。

第3章 佐土原城跡発掘調査の成果

1. 調査前の知見

佐土原城は、戦国期日向48城を治めた伊東氏の中心的居城の中の1城である。その後、島津家久・豊久が統治し、関ヶ原の戦い後徳川直轄領となり江戸期に入り、島津以久が城主となる。室町前半期から戦国の動乱期・江戸時代、そして、明治2年の広瀬転城まで約500年間、日向地方の様々な面において佐土原城は要の役割を担ってきた。その重要な城を裏付ける史跡として城下・寺院、石塔、墓葬地跡が城郭の周辺に点在する。城下は、主に伊東氏、5代祐寛の弟・祐賀が当御領主として佐土原城に入城して以来、築かれた武家屋敷（大手口・鳴ノ口・野久尾口・十文字口）と町人町から形成されている。さらに飫肥街道・薩摩街道・肥後街道・米良街道が一つ瀬川を前にした城下で結節するなど、生産・流通・精神上において中世から近世にかけて日向文化を語る上で要の地であった。

調査区域は、江戸末期（嘉永期～安政期）の絵図に掲載されている建物名から主に御城・御厩・上御門・下御門が所在していたと推定されるところにあたる。調査範囲は平成元年10月から平成2年3月までの調査では3,000m²で御城の中心部に位置する。次の平成2年6月から平成2年10月にわたった調査では2,000m²で御厩・上御門・下御門が建っていた御城の周辺部において実施した。調査を進める前段階に、前述の御城の範囲を含めた絵図上の御番所と会所、島津殿衛殿の間の堀を確認調査した。

本丸跡については、「天正年中佐土原城図」（飫肥城資料館蔵）記載上の天守は「想像のもので、実際は初期段階で櫓程度の建物ではないか」と考えられていた。また、他の建築に関しては、南北朝の伊東氏時代に築かれ、寛永2年（1625年）2代島津忠興の段階で、山上の城を山下の二ノ丸へ移していることが古文書（旧事集書）に記されている。

山城の全体の縄張りは、伊東氏時代の原型にその後の統治者により改変された部分とそのまま活かされた部分に分けられる。特に、本丸・南ノ城と松尾丸の虎口は、それぞれの時代の縄張りの特性（伊東・織豊期）としての可能性がある。

2. 調査の方法

居館部は、平成元年2月から3月に行われた確認調査で平面地形に対して方眼状に試掘溝を設定した。設定の目的は、広い範囲の遺構の出土状況を平面・垂直に把握し構造的に理解するためである。堀の確認調査は、東西方向に試掘溝を2本設けて重複のバケットにより埋土を掘りあげた。本丸部の確認調査は、居館部と同じく地形に沿って東西南北に方眼状の試掘溝を進めた。天守台跡は調査前の現況であった石敷の平面正方形を十字に切った試掘溝を用いた。そこで石垣の存在を立体的に認知した。

《第1次、第2次の発掘調査範囲と方法》

居館部の調査は、中心部3,000m²、周辺部2,000m²、計5,000m²で構成されているが、中心部を第1次（平成元年10月～平成2年3月）、周辺部を第2次（平成2年6月～10月）と2期に分けて行った。調査方法は、第1次、第2次共に同じであり、あらかじめ事前調査で確認した遺物包含層の

上部までの耕作土（約25cm）を重機のバケットで剥ぎ、それより下は鍛簾等を用い、作業員の手作業で遺構面を検出した。

検出した遺構は、以下の目的によって記録した。

遺構包含層の色別と出土遺物の時期を相互に分析し、当時の建物や関連施設の状況を読む。例えば、初期にどのような場所に何間規模（建物の広さ・規格）で、またはどのような性質の建物（掘立柱・礎石）が建っていたか、その後の展開はどうであったかをさぐる。

遺構（柱穴・溝・土坑・井戸等）には、廃棄・遺棄した後に周囲の土が入り込み、その時々の環境により包含される土の色や土壌に違いが表出される。柱穴に柱根が残っているかどうかを確認するために柱穴を半截し検証する。

遺構から出土する遺物（遺物が遺構の底に貼り付いて出土した場合は、遺構造成時と同時期）の地点を的確に押さえる。各遺構毎に土層観察用畔畦を設ける。縮尺1/100平面図に平板測量を実施する。平面図には遺構の包含土の色別と柱根の直径・出土遺物の種類を記入。同じく1/20で土層観察用畔畦を記録する。

以上の作業による記録は、建物構造や建設時期、出土遺物から当時の生活環境を復元するまでの手がかりとなる。

最終は、縮尺1/50でラジコンヘリコプターによる空中測量及び空中撮影をする。全ての記録後、遺物の採り上げを行い調査を完了する。

《本丸・天守台跡の確認調査の方法》

本丸部の確認調査は、調査対象面積約3,800m²の内、トレンチ面積390m²で実施した。トレンチは、北東・南西方向、南東・北西方向に約10m間隔で方眼状に設定した。表土から約30cmで遺構面が検出された。出土遺物・遺構は、200分の1の縮尺で平面図を作成。

天守台跡の確認調査は、調査対象面積約140m²の内、トレンチ面積23m²で実施した。トレンチは、天守台跡を東西南北十字に切る形で設定した。遺構は、天端部の集石がすでに表土に露出しており、トレンチによって石垣の肩の位置を検出して天守台の範囲を確認した。出土遺物・遺構は、200分の1の縮尺で平面図を作成した。

3. 居館部第1次・第2次発掘調査

(a) 調査範囲

調査対象面積 約5,000m²　調査面積 約5,000m²（内：3,000m²中心部、2,000m²周辺部）

(b) 基本層序

層耕作土（20cm）・2層整（5cm）・3層包含層（10cm）

(c) 遺構

建物跡は3棟確認できた。1棟は上御門に面する。建物の規模は、南北八間、東西七間半、東側に幅一間の張り出し、西・北側に礎石を検出した。

この建物の南側は、南北八間半、東西六間の建物跡があり、さらに、南側に二間半×五間半の建物跡がある。その他の遺構は、建物跡に沿って南から北方向に木組み暗渠と、石組み暗渠が埋設されている。SD 1・2・3は溝の上から瓦が出土した。（瓦は建物が廃棄された時点で溝に落としたと推測）。北側端は、下御門の位置に東西方向に2列4間の柱穴がある。北側面にSK 1～7（性格不明土壙）、SB 1～4（性格不明建物跡）、東側には多くの掘立柱

柱を検出した。北西隅にS E 1(井戸)。北東隅にH 7(性格不明穴)。東側端に列石が南北方向一列に南端から北端にかけて走っている。また、北端から南に向けて約20m地点から約10m幅で上御門の位置と推定される箇所に礎石が不規則の配列ながら確認された。

柱穴は、礎石を作りタイプ、礎石が後世に飛ばされ根石だけが残るタイプ、掘立柱タイプの3種類に分けられる。第1次・第2次店舗部調査の遺構の柱穴総数は661穴、上記建物3棟に関する柱穴は175穴である。3棟の建物跡は、礎石タイプと根石タイプの柱穴である。その他の柱穴は、掘立柱が主である。

(d) 遺物

総体的に焼物の分類は、日本製陶磁器が74.6%を占め、その他は中国製陶磁器（貿易陶磁器）14.7%、土師器5.1%、不明5.6%によって構成されている。(32-B)

時期別の食膳具種類別構成は、青磁・白磁を主とする14世紀～16世紀、染付を中心とする16世紀～17世紀、関西系が5割を占める17世紀～18世紀、最終期の18世紀～19世紀以降は九州・在地系が窯業の開業により佐土原城の需要の4割を占める。(32-②)

瓦は、軒丸瓦の三ツ巴文・連珠文の大きさから織豊系瓦と17世紀以降の瓦に分けられる。種類は、軒平瓦・棧瓦・掛平瓦・掛丸瓦・平瓦・丸瓦等である。出土瓦中で平瓦の凸面や側面に「大坂瓦細工人」等の銘入り瓦が4点確認できた。

4. 本丸部確認調査

(a) 調査範囲

調査対象面積 約3,800m²　調査面積 約390m²

(b) 基本層序

1層表土(20cm)・2層包含粘土(10cm)

(c) 遺構

縄張り上、南側上段の曲輪Ⅰと北側下段の曲輪Ⅱに分けられる。曲輪Ⅰは、中心部から東側に掘立柱、溝が北東・北西方向に走る。井戸は本丸の中心より北西方向にある。

曲輪Ⅱは、西側上段と東側下段で構成される。上段は、礎石と天守台の破却時の石垣と天端部の集石、下段は掘立柱と東西方向の溝が走る。

(d) 遺物

出土物は、陶磁器と瓦である。陶磁器の内訳は、器種は壺・塊・すり鉢・壺の蓋で、生産地は備前・肥前・延岡・中国、製作年代は13世紀～18世紀までである。瓦の種類は、軒平瓦・軒丸瓦・掛平瓦・掛丸瓦で、時代は軒丸瓦の中心飾・唐草文、三ツ巴文、連珠文の特徴から織豊期にあたる。その他に風字硯が1点出土した。

瓦の出土地点は、主に曲輪Ⅰの東側先端部と曲輪Ⅱの上段東側先端部である。

5. 天守台跡確認調査

(a) 調査範囲

調査対象面積 約120m²　調査面積 約54m²

(b) 基本層序

1層表土(30cm)・2層瓦廃棄(20cm)・3層瓦廃棄(20cm)

(c) 遺構

天端部の表面は、天守台の破却時に石垣の裏込め石（河原石を利用）をまとめて廃棄して集石としている。石垣は四方 2段組の10m×12m平方。礎石は 3箇所で確認。

(d) 遺物

出土物は、数多くの瓦と数点の陶磁器からなる。

瓦の種類は、軒平瓦・軒丸瓦・掛平瓦・掛丸瓦・鳥衾・鰐瓦。時代は軒平瓦の中心飾・唐草文、軒平瓦の三ツ巴文・連珠文の特徴から織豊期に相当する。

陶磁器の内訳は、器種は塊・皿で、生産地は中国景德鎮、製作年代は16世紀～17世紀初までである。

第4章 まとめ

1. 佐土原城跡出土遺物・遺構の検討

(1) 調査報告

ア. 建物遺構の構成

遺構は、礎石を伴う柱穴・掘立柱が主な建物遺構で、その外に屋根の庇周辺に瓦落ち遺構、石組み暗渠、木組み暗渠、井戸・廐棄土坑が検出され、さらに、玄関入り口の敷石、土塀の列石、上御門、下御門にあたると考えられる所で柱穴などを出土確認した。

イ. 出土遺物の状況

出土陶磁器の割合は、14世紀～15世紀は食膳具の中で2%、15世紀～16世紀では3%、16世紀～17世紀は22%、17世紀～18世紀は42%、18世紀～19世紀は27%、19世紀は3%の割合で、貯蔵具・調理具もほぼ同等の割合である。

瓦は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・掛丸瓦・掛平瓦・棟瓦が出土している。

(2) 解釈

ア. 陶磁器について

陶磁器の生産地及び出土量は、14世紀～16世紀まで輸入磁器が主体であったのが、17世紀以降、国内産の陶器が供給の主役となった。また、国内産においても17世紀～18世紀の53.5%を占めていた関西産が、18世紀～19世紀に移ると16.2%に減り、代わって九州産が28.3%搬入されるようになる。

これは、わが国が16世紀までは塊・皿などの食器は、主に中国からの輸入磁器に向けられていた事情と合致する。

国内産においても、東日本の瀬戸・美濃と西日本の唐津焼きの2大流通圏が形成されていたが、17世紀になり庶民の経済力が増してくると、各地で窯が開かれ、その一環として佐土原城でも関西系・九州系・在地系の陶磁器が扱われるようになる。

イ. 瓦について

瓦においても、平瓦凸面・側面に「大坂瓦細工」等の刻印が押された瓦が4点確認されており、関西方面との結びつきが伺える。

ウ. 建物の使用年代

・柱穴内からは陶磁器が出土したが、建物の年代を特定するには至っていない。

・出土遺物と柱穴による建物の配置関係から居館部の建造歴は、初源は16世紀で最終建て替え期は18世紀と推測される。

エ. 建物の変遷

建物の変遷は、文献上では、寛永2年（1625）に本丸から二ノ丸へ居館を移す時期と、明治2年（1869）に佐土原城から広瀬へ転城する2期の記載が参考となる。

出土陶磁器による時期変遷（第7図）は、16世紀（掘立柱）・17世紀I（掘立柱：礎石）・17世紀II（礎石）の3時期からなる。陶磁器の出土量のピークは、17世紀～18世紀である。

瓦においては、出土瓦の棟瓦は明暦3年（1657）以降しか使用されていない瓦で、その

他の瓦も、巴文・連珠文の型から同時期の瓦といえる。ただし、出土瓦の一部に1600年以前と推測される軒丸瓦が含まれている。

(3) 今後の調査課題

今後、居館部の出土遺物と本丸部及び天守台跡の出土遺物の分析により、居館部と本丸の使用時期をさらに究明する。また、出土遺物から交易圏及び使用意図の相違を解明していく。

出土遺構・遺物等と古文書・古地図との相関から居館部の使用年代や機構等の検証を深める。

2. 佐土原城跡出土瓦の分類

佐土原城跡の発掘調査において、現在までの調査時点で平均して多量に出土した遺物は瓦である。種類は、軒平瓦・軒丸瓦・掛平瓦・掛丸瓦・棟瓦・鳥衾の6種類出土した。その中で軒平瓦と軒丸瓦の2種類の瓦文様について述べる。また居館部・天守台跡の文様関係及び製作技法は、「天守台跡の本報告」で総体的に分析する。

(1) 軒平瓦の分類（第31表） A類～D類<居館部> E類～G類<天守台跡>

A類

左右に唐草文を均等に配する瓦当文様。中心飾に桐文。葉の根が離れている。

B類

左右に唐草文を均等に配する瓦当文様。中心飾に三葉文。葉の根がつながっている。

C類

左右に唐草文を均等に配する瓦当文様。中心飾に三葉文。葉の根がつながっている。

D類

左右に唐草文を均等に配する瓦当文様。中心飾に桐文。葉の根が重なっている。

E類

左右に唐草文を均等に配する瓦当文様。中心飾に三葉文。葉の根が離れ5分割。

F類

左右に唐草文を均等に配する瓦当文様。中心飾に一葉文。

G類

左右に唐草文を均等に配する瓦当文様。中心飾に三葉文。葉の根が離れる。

(2) 軒丸瓦の分類（第32表） A類～D類<居館部> E類～H類<本丸部・天守台跡>

A類

右巻き三ツ巴文を内区に配す。11個～14個の珠文（径1.4cm前後）をめぐらす。瓦当径は14cm前後を測る。周縁は、幅がやや広く内区と比べて高い。

B類

左巻き三ツ巴文を内区に配す。13個～18個の珠文（径1.3cm～1.5cm前後）をめぐらす。瓦当径は15cm前後を測る。周縁は、幅がやや広く内区と比べて高い。

C類

左巻き三ツ巴文を内区に配し、尾が一部重なり圓線状を呈する。13個前後の珠文（径1.1cm～2cm）をめぐらす。瓦当径は15cm前後を測る。周縁は、幅がやや広く内区とのレベル

差はほばなし。

D類

左巻き三ツ巴文を内区に配す。14個前後の珠文（径0.8cm～1.1cm前後）をめぐらす。瓦当径は14cm前後を測る。周縁は、幅がやや広いタイプとやや狭いタイプに分けられ、内区とのレベル差はほばなし。

E類

右巻き三ツ巴文を内区に配し、頭部は互いに接する。30個前後の珠文（径0.3cm前後）をめぐらす。瓦当径は12cm前後を測る。周縁は、幅がやや広く、内区とのレベル差はほばなし。

F類

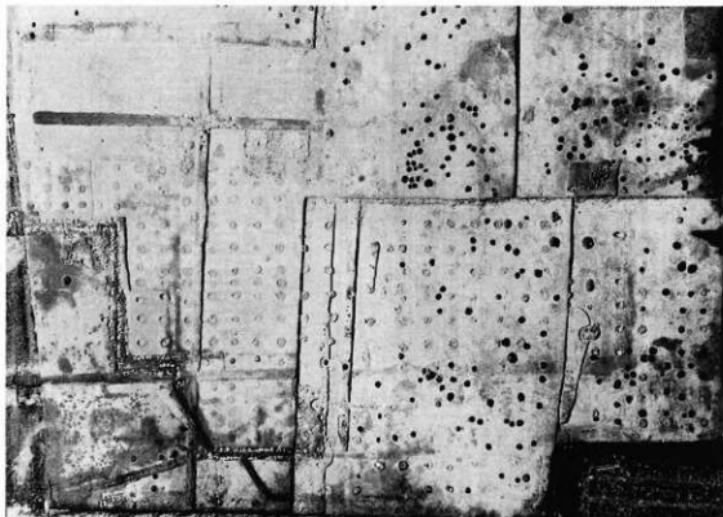
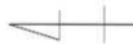
左巻き三ツ巴文を内区に配す。16個前後の珠文（径0.8cm前後）をめぐらす。瓦当径は12cm前後を測る。周縁は、幅がやや広く、内区とのレベル差はほばなし。

G類

左巻き三ツ巴文を内区に配す。16個前後の珠文（径0.8cm前後）をめぐらす。瓦当径は12cm前後を測る。周縁は、幅がやや広く、内区と比べて高い。

H類

右巻き三ツ巴文を内区に配す。14個前後の珠文（径1.1cm前後）をめぐらす。瓦当径は13cm前後を測る。周縁は、幅がやや広く、内区とのレベル差はほばなし。



左側暗渠が走る。中心部居館の建物跡（礎石）。右斜上、建物跡（掘立柱）。



中心部第1次調査地埋戻し跡。真上、左側第2次調査地。真上左右石列。左側「下御門」礎石？

居館部第1次・第2次調査空中写真〔上 第1次調査・下 第2次調査〕



重機による表土除去作業



重機による表土除去作業



造構検出作業



造構検出作業



造構掘り込み作業



造構掘り込み作業（玄関前の敷石）



造構掘り込み作業（横石）



造構掘り込み作業（掘立柱）

居館部第1次調査造構及び検出作業風景写真



犬走り造構



石組み暗渠



木組み・石組み暗渠



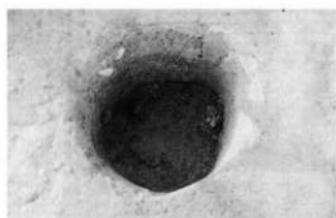
木組み・石組み暗渠



瓦落ち造構



瓦落ち造構



掘立柱内寛永通寶出土状況



刻印瓦

居館部第1次調査造構出土状況写真



居館正門（上御門）側石列（土塙の基礎）



重機による表土剥ぎ



南北方向に石列（土塙の基礎）



軒丸瓦出土状況



土坑内遺物出土状況



居館内遺物出土状況



暗渠遺構検査状況



暗渠遺構側溝検出状況

居館部第2次調査遺構及び検出作業風景写真

第1図 佐土原城跡の位置と周辺の聚落



— N —

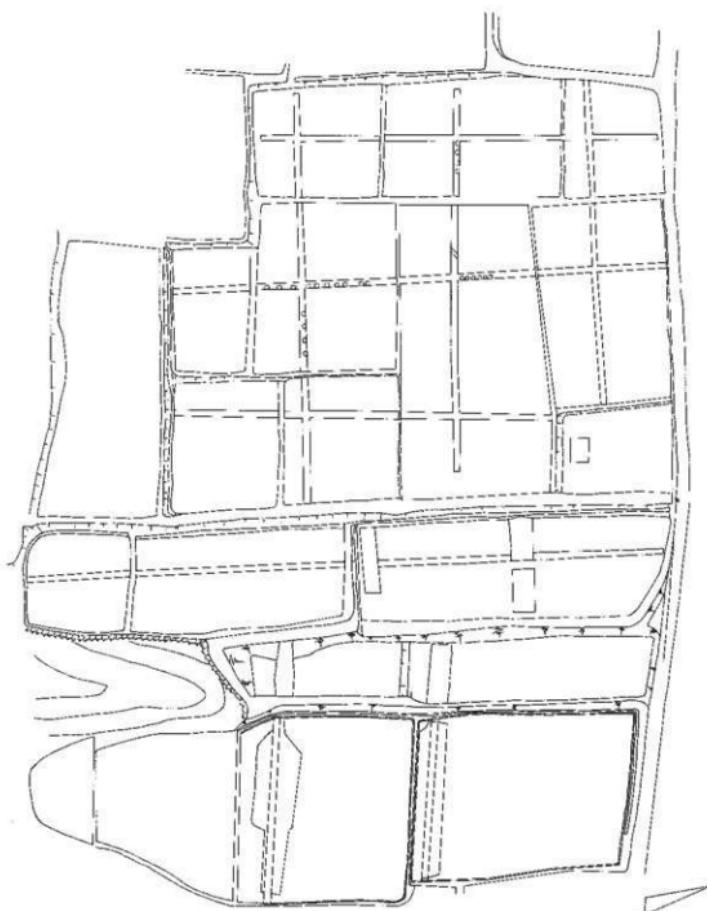
I 本丸	k 虎口5
II 北部本丸	l 埋切5
III 枝立櫓	m 十畳敷
IV 根室櫓	n 堀切6
V 露の城	o 埋切7
VI 水城	p 田舎町平地
VII 本丸前曲輪	q 腹出輪
VIII 松石丸	r 横堀
IX 本丸御門	s 天守台
a 虎口1	t 土橋
b 虎口2	u 通路跡
c 虎口3	v 埋引堀跡
d 虎口4	w 地引8
e 大手道	x1 井戸2
f 堀切1	x2 井戸2
g 堀切2	x3 井戸3
h 堀切3	x4 井戸4
i 堀切4	x5 井戸5
j 堀切5	y 榛台跡2
k 堀切6	z 上堀跡



第2図 佐土原城跡調査図（八巻季夫原図作成）



第3図 調査区設定図



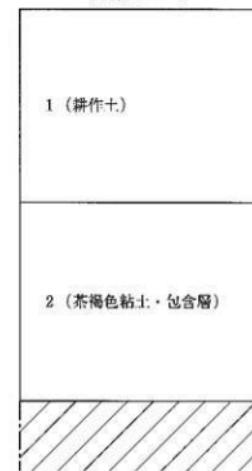
○ 据立柱
= 溝

0 10 20 40 (m)

第4図 居館部確認調査造構平面図

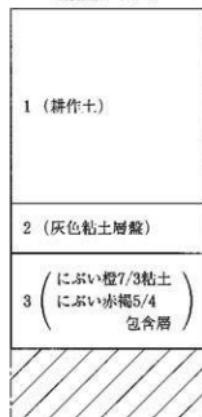
69.000m

本丸部トレント



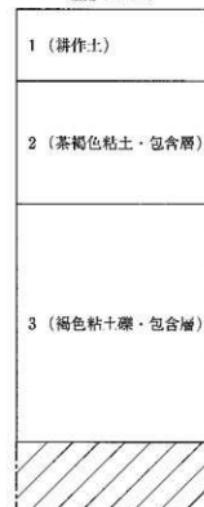
12.400m

居館部トレント



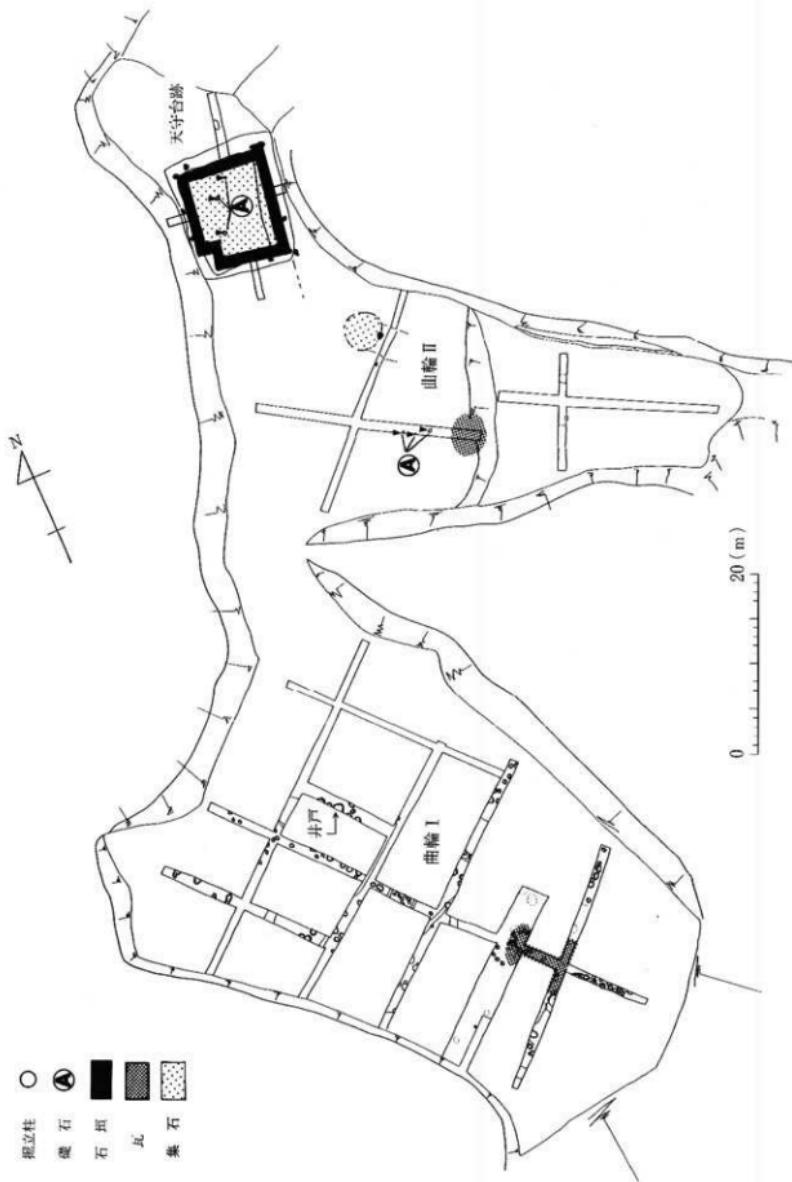
9.800m

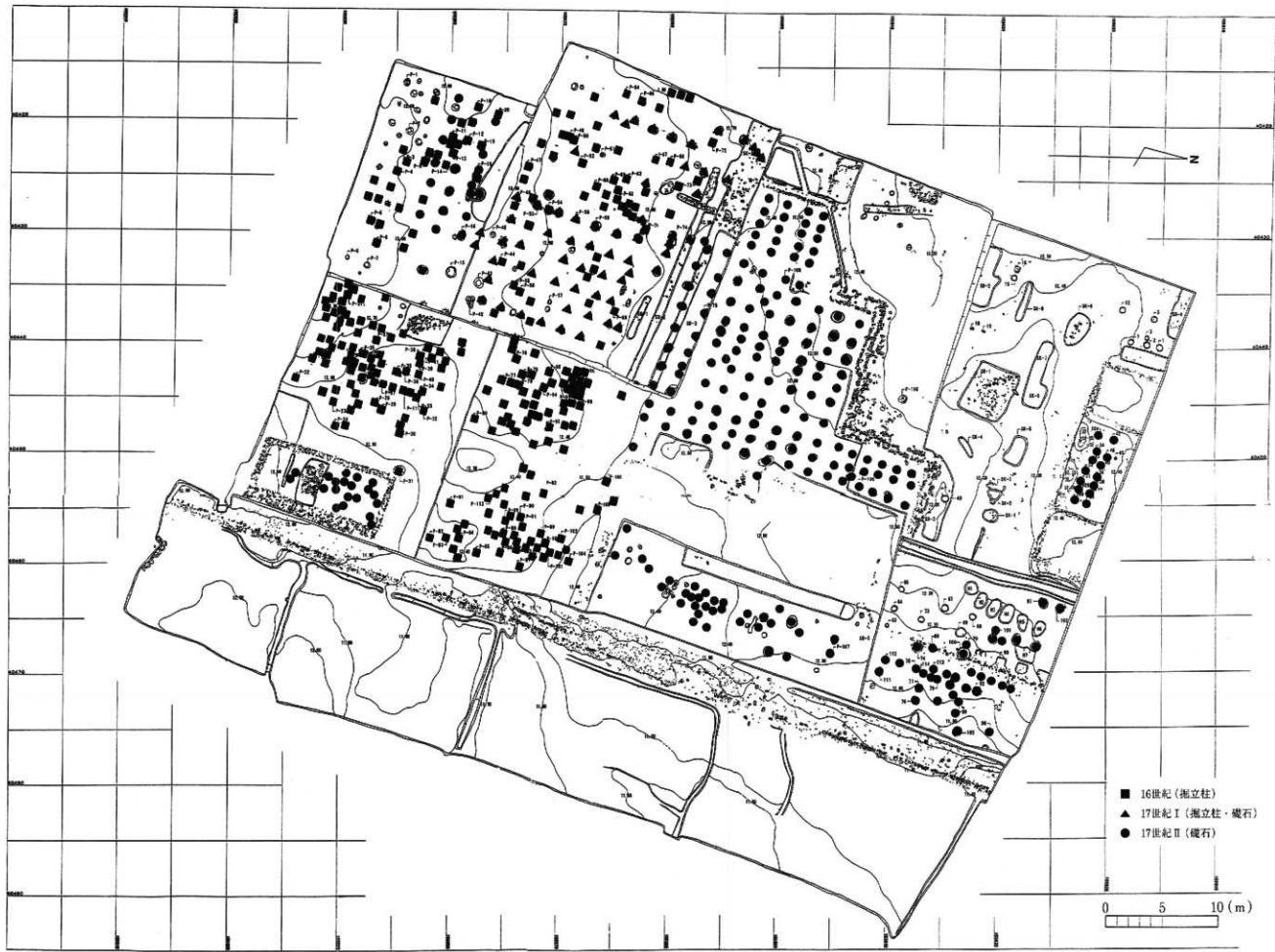
堀跡トレント



第5図 基本層序模式図（居館・本丸）

第6図 本丸部遺跡調査遺構平面図



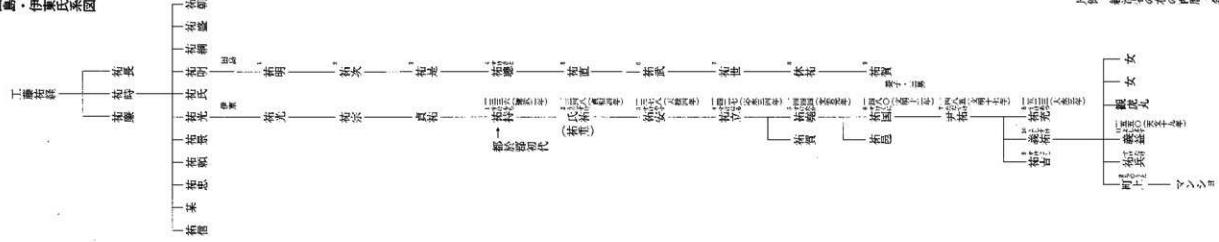


第7図 居館部建物遺構の時期変遷

凡例／各欄の○記号上の数字は、西暦の下2桁を示す。
各統治者の左上の数字は統治者として何代目かを示す。

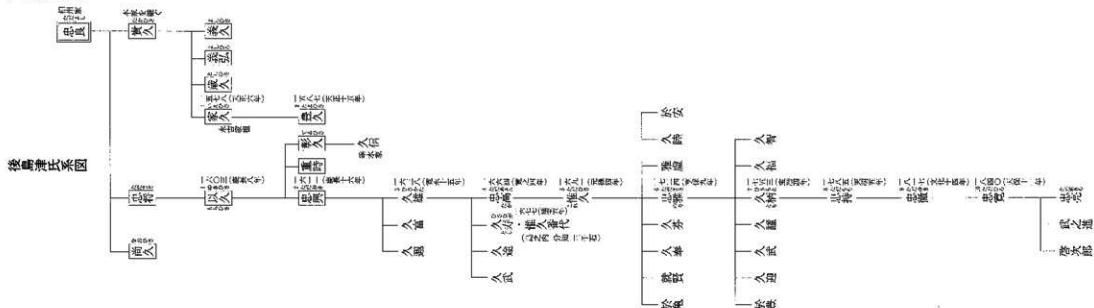
第8図 佐土原城をめぐる統治者の変遷及びできごと

(1) 田島・伊萬庄系図



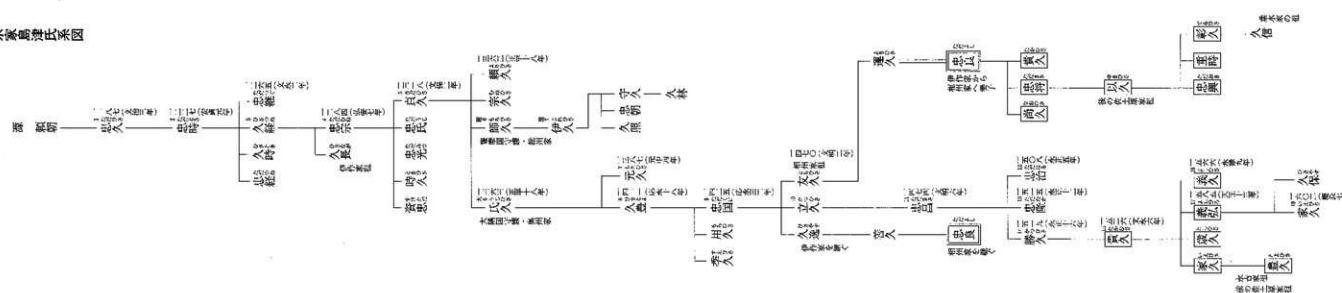
(2) 在土原島津氏系図

前鳥津氏系図

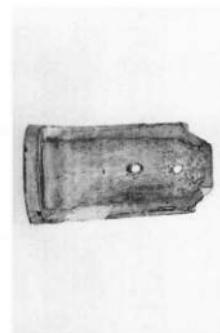


第9図 在土原城の統治者に関する系図

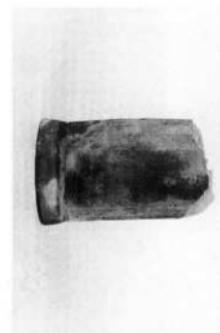
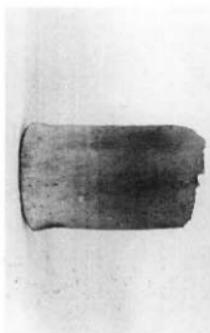
(3) 宗家島津氏系図



1



2



3



居館部出土瓦写真〔軒丸瓦〕

4



5



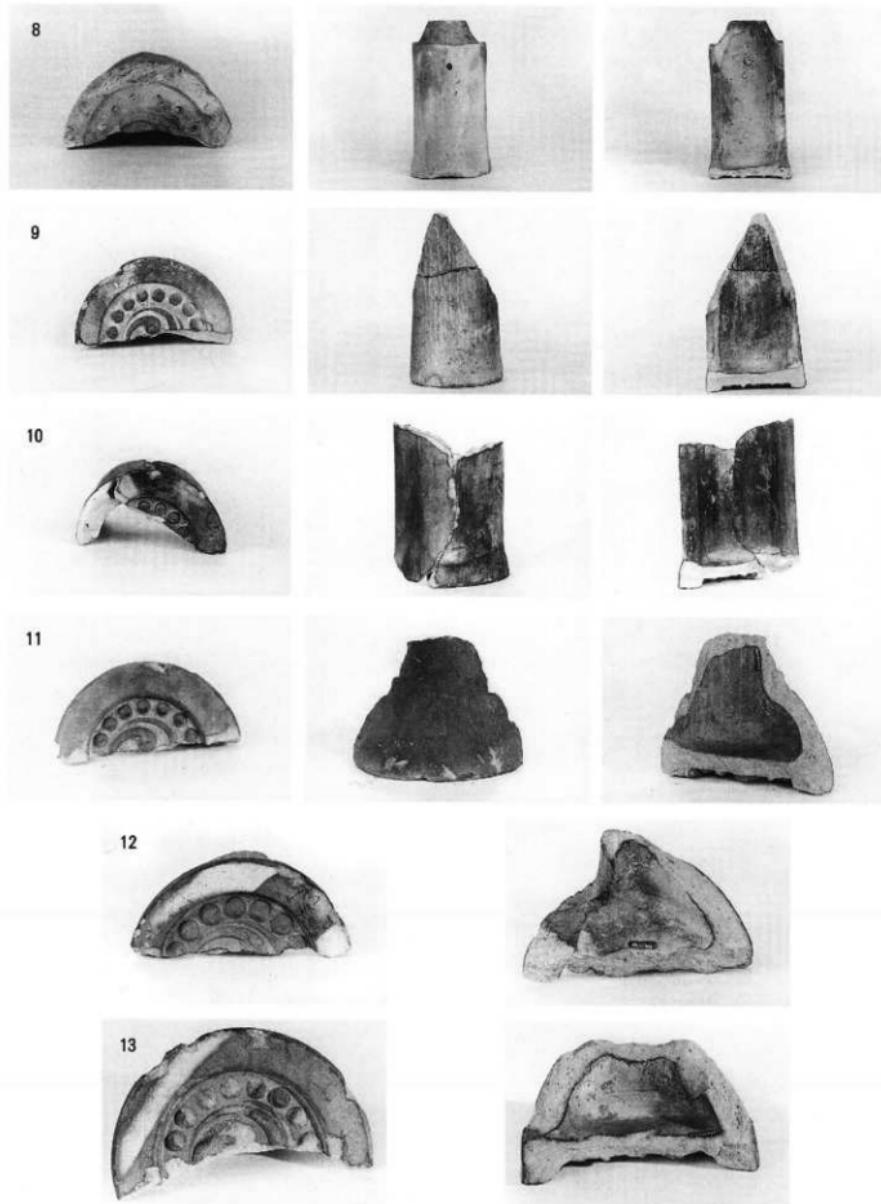
6



7



居館部出土瓦写真 [軒丸瓦]



居館部出土瓦写真〔軒丸瓦〕